横井小楠から明六社へ（2）

（一）横井小楠
――朱子学の近代的開眼――②

上　原　三　至

「沼山閑居雑詩」安政４年（1857）小楠47歳,『国是三論』万延元年（1860）52歳,「幕政改革七条」文久二年（1862）54歳,『海軍問答書』・『沼山対話』元治元年（1864）56歳，等をみると、横井小楠の経綸の根底には、血統論や封建的世襲制に対する否定的傾向が確かに存する。

儒学者にとって理想的な社会とは、中国古代の夏・殷・周三王朝の封建制度の整備された社会、その中でも特に周王朝を指している。だから儒学者小楠も至る処で「三代の治教」、「堯舜三代」、「唐虞三代の治道」、「堯舜孔子の道」などと引き合いに出して、それを真の理想、絶対的規範と同義に用いている。

司馬遷『史記』や儒教の経典「四書五経」が語る儒教伝説に依れば、聖天子の代表として知られる堯・舜や彼ら二帝に仕えて夏王朝の始祖となった禹は、いずれも部族連合体の中で選ばれて天子となったものたちである。これが禅譲であって、血統・系譜に関りなく有徳の士から有徳の士へと地位が受け継がれていくと説明している。

小楠は言う、「堯の舜を選ぶゆえん、是れ真に大聖たり」(1)と。

陶唐氏の堯帝は、自分の息子を後継者に選ばず衆望の高かった宰相の舜に帝位を禅譲した。そのため陶唐朝は堯一代で終り、また有虞朝開祖となった舜も帝位を家臣の禹に禅譲した。禹は積年の課題の治水事業を成功させた英雄であった。彼は勤勉にして徳があり、仁愛の心が深く、言行には信頼が置け、声には自然のリズムがあり、動作には基準があり、言動は度を超えず、倦むことなく、しかも和やかで、人の鑑となっていた、と『史記』夏本紀は記している。

実は、舜帝には商均という長男がいたが、舜帝は自分の跡を継ぐ者は禹であるとして天に推挙した。天子に成るには、天が命じて初めて決定するからである。

かくして、禹は夏王朝（夏后氏）の開祖となり善政を施いたが、在位10年にして東方巡狩中客死した。禹帝は崩ずるに当たって禅譲というそれまでの慣例に従い、家臣の益に帝位を禅譲した。だが益は遠慮して、禹の実子である啓に帝位を譲った。ここから中国の天子の世襲制が始まったという。国家のすべてを王が私有してそれを次世代に受け渡していくという世襲制王朝はそれまでの社会と大きく異っていた。

『竹書紀年』によると、夏王の世系は17君、14世の世次が明らかで四百七十二年続いたとあるが、その間夏の天下が平穏無事であったかというと決してそうではない。

三代太康から中康、后相に亘って東夷との間に争乱がおこり、夏王は都を追われ夏王朝は一時絶えその後再興したが、十四代孔甲が愚昧、怠惰で、夏后氏の徳はしだいに衰微した。ついで、〝酒池肉林〟で知られる十七代桀は暗君・放蕩者の見本のような男であった。人民に苛斂誅求して瑤台という絢爛な宮殿を造営し女楽３万人を養い淫楽一途に耽溺した。終日、天空には鐘鼓が鳴り響き、爛漫の歌声は百里に届いたという。かくして、民心は夏王朝から完全に離反し、天命によって殷の湯王に滅ぼされたのである。

要するに、世襲制成立以後の夏王朝には唯一人の名君も出現しなかったのである。

だから小楠にいわせれば、名君が輩出する可能性が大きい禅譲こそ天理に適う道であって、世襲制を容認・擁

護する儒者は頭の回転の遅い迂儒なのだ。「迂儒此の理に暗く、之を以って聖人病めりとなす」[2]。さらに、「人君何すれど天職なる、天に代りて百姓を治むればなり。天徳の人に非らざるよりは、何を以ってか天命にかなわん。……ああ血統を論ずる、これあに天理に順ならんや。」[3]と血統論を激しく拒否する小楠。また、公武合体論者であった小楠が皇統連綿たる天皇制に対して批判的であったか、否か。それは残された資料からは判然としないが、しかし少くとも、皇統不滅に自らを托す尊攘派は天理に順なずと考えていたのではなかろうか。

というのは、小楠の経綸は西洋近代の共和制すら視野に入れていたのだ。井上毅との『沼山対話』を見てみよう。

客　「英より初発兵艦を以てしいて通商を求め候は、是また無理なることにては無く候哉。」

翁　「イギリスはイギリスの割拠見、ロシヤにはロシヤの割拠見にて、各一国々々の議論主張致候故、追々惨怛の戦争引起し候。已に近年両国釁を構え、五年か十年内に大乱に至り可申、如何なりゆき可申乎、甚だ痛ましく被存候。全体割拠見と申す者免れがたきものにて、後世は小にして一官一職の割拠見、大にしては国々の割拠見、皆免れざることに候。真実公平の心にて天理を法とり此の割拠見を抜け候は、近世にてはアメリカワシントン一人なるべし。ワシントンのことは諸書に見え候通り、国を賢に譲り宇内の戦争をやむるなどの三個条の国是を立て、言行相違なく是を事実にふみ行ひ、一つも指摘すべきことは無之候。――後略――。」[4]

この対話より4年前に書いた『国是三論』でも、小楠はワシントンを賛美し次のように述べている。

「方今万国の形勢丕変して各大に治教を開き、墨利堅に於ては華盛頓以来三大規模を立て、一は天地間の惨毒、殺戮に超たるはなき故、天意に則って宇内の戦争を息むるを以って務とし、一は智識を世界万国に取て、治教を裨益するを以って務とし、一は全国の大統領の権柄、賢に譲りて子に伝えず、君臣の義を廃して一向公共和平を以て務とし、政法治術其他百般の技芸・器械等に至るまで、凡地球上善美と称する者は悉く取りて吾有となし、大に好生の仁風を揚げ、・・・・・・・・」[5]

すなわち、小楠は言う。各国の割拠見（エゴイズム）に基づく主義主張が悲惨な戦争を引き起すのだが、この割拠見、小は一官吏のポスト・エゴから、大は国家的エゴイズムまでそれを超えることは困難である。近代ではアメリカ初代大統領ジョージ・ワシントン独りだけがエゴイズムを抜け出ることができた。何故ならワシントンは、真実公平の心で天理に従う政治を行った人物だったから。彼は3つの国策を立てて善政を施した。1. 独立戦争を集結させ諸外国に対し平和政策を採った。2. 知識を世界に求め、政治や教育の整備に努めた。3. 大統領の権力を世襲ではなく、賢人を選んでこれに譲ること。また君臣間の道徳を廃してただ一途に公共平和の心を持つことを任務とした。

ここで特に注目すべきなのは、ワシントンが世襲制や君臣間の道徳を廃除したことを、小楠が称賛していることである。「一君万民」、「忠義孝行」、「恭順」などの徳目で示される幕藩体制下の朱子学では、「君臣間の義」は中心命題の一つである。すなわち、君主に対して家臣が忠誠を持って仕えることが儒教道徳の基本である。それゆえ、儒教道徳が、君臣道徳、上下道徳、身分道徳、封建道徳と呼ばれるのである。

ところが、儒者である小楠が「君臣の義」よりも、西洋近代思想の中心概念の一つである「公共」を重視しているのである。

さらにつづけて小楠は『国是三論』で述べる。

「・・・・・・・・・英吉利に有っては政体一に民情に本づき、官の行ふ処は大小となく必悉民に議り、其便とする処に随て其好まざる処を強ひず。出戎出好も亦然り。これによって魯と戦ひ清と戦ふ兵革数年、死傷無数、計費幾万は皆是を民に取れども、一人の怨嗟あることなし。其他俄羅斯を初各国多くは文武の学校は勿論病院・幼院唖聾院等を設け、政教悉く倫理によって生民の為にする急ならざるはなし。ほとんど三代の治教に符合するに至る。」[6]

このようにみてくると、小楠がアメリカの共和制やイギリスの民本主義・議会制を高く評価していたことは確かである。しかしそれはあくまで中国古代の理想化された社会、夏・殷・周三代の封建制度に合致している限り

においてなのである。だから、「民情に本づき」とか「必悉民に議り」といっても為政者である賢君の好生の徳、つまり人民の生を労わる仁愛の徳による上からのものである。決して、自由・平等の理念からくる下からの選挙制度を考えているわけではない。しかし小楠が思想家として柔軟で優れているのは、実はそれが彼の最大の矛盾でありアキレス腱でもあるのだが、醇乎たる儒者でありながら封建制の枠組を無意識的に踏み出している点にある。

何故、そのような思索が小楠において可能であったのか。それは小楠が儒学の学問としてのパラダイムを無意識的に解体して、そこから本質を取り出そうと意図したからである。彼は学問の眼目を「慎思」[7]においている。「書経に堯の徳を称して文思安々と申したり。此の文思の字、学問の眼目にて、古の学は皆思の一字に在としられ候。」[8]『沼山対話』。ようするに小楠は、儒学と主体的に対応することによって、儒学でいう理想的社会、三代の封建制をその具体的制度や形式を「仁」とか「至誠惻怛の心」という理念に抽象したのである。だから小楠にとっては具体的な組織や制度よりも、そこに「仁」や「至誠惻怛の心」が存在するか、否かが問題になるのだ。すなわち、為政者の心術の態様が政治の根本条件になっているわけである。

以上のような小楠の封建制に対する対応を、同じ儒学者の佐久間象山と比較してみれば小楠の開明性がより明瞭になる。

周知の「東洋道徳，西洋芸術」[9]と象山が言う、「東洋道徳」とは漢土夏・殷・周三王朝の封建制を指している。それが儒学者にとって理想的な社会であり、その点は象山も小楠も同じである。ところが象山は、当時の日本の徳川幕府体制の封建制が中国古代三代の封建制に最も近い社会であると確信していた。

だから、徳川封建制下の階層秩序を天地自然の秩序と捉え、いや象山の社会政治体制の領域への関心は低く西洋文明への関心もその芸術（テクノロジー）分野に集中していたから、封建制を損なうような政治改革には象山は強硬に反対する。

文久二年（1862）秋、幕府は朝廷の干渉によって、将軍後見職に一橋慶喜、政治総裁職に前福井藩主松平慶永（春嶽）を任命し一連の幕政改革を断行するが、その基本方針は、春嶽のブレイン小楠の『国是七条』[10]を中核とする献策であった。その主たる内容は、参勤交代制の緩和，妻子の帰国，譜代以外からの人材の登用、大名諸侯の供行列や服装の簡素化などである。

そのような改革は行き過ぎだと象山は一万数千字にのぼる長文の「上書」[11]をもって批判しつつ、あわせて内外の政治に関し幕府のとるべき基本方針を論じた。

この「上書」は、松代藩との疎隔が生じ、幕府には伝わらなかったが、その文面は象山の儒学者としての自信に満ちている。

その中から改革批判の要旨二、三を挙げると、イ、天下の大政を担うのは大名諸侯（象山は譜代大名・高禄の旗本を特に意識し、三家・家門・外様大名はこの中に入っていないようだ。[12]ちなみに松平春嶽は家門大名隠居で本来ならば大老職に比肩する政治総裁職に登用されることはありえない）であって、この制度こそ日本の国体の優れているところである。　ロ、その大名諸侯の供揃えを簡略化するなど以てのほかである。諸侯は常にその禄高に応じて大勢の家来を養っている。その家来を引き連れて行動するのが当然であって、国体の異なる西洋諸国の大統領や大臣が2、3人の供を連れただけで外出するのを真似てはならない。大統領や大臣は身分の低い一般庶民から選ばれて成るので本来自分の家来など持っていないのである。　ハ、「貴賤尊卑の等は、天地自然・礼の大経に有之」[13]。身分差を表わすことは政治制度上不可欠の原則であるから、身分の高い大名諸侯が庶民と同じ綿服を着用することは、三代の聖王の衣服の制に悖るもので到底是認できぬ。　ニ、中国春秋時代に儒学で重用された「辞命」を正すこと、この際より一層重視すべきである。それは春秋時代、鄭の子産は晋、楚など強国に伍してくためには「辞令」に拠るしかないと決意し、文人を集めて国際交渉文書の修飾潤色に努めた。その甲斐あって鄭は五十余年も兵禍を免れえたとの故事による。象山は孔子の時代（前6世紀～5世紀）の中国大陸内部での国際関係の先例を、19世紀のグローバルな国際社会に適用すべきだというのだ。

国際関係において、富国強兵の基礎は西洋技術の導入・開発にあると力説する新しがり屋で、進取の気性に富む象山が、一方において「辞令を正す」などと古色蒼然たることを持ち出すのである。ここに、陽明学を排し正統的朱子学者をもって自ら任ずる象山の本質がある。

『論語』為政篇に「学びて思わざれば罔し、思ひて学ばざれば殆し」とあるが、どちらかといえば小楠が自己の体験に観照して主体的に思索する学問的個性の持主であったのに対し、象山は「思ひて学ばざれば殆し」すなわち学問の伝統を通じて学ぶことに傾く権威的性向が強い。「近代以来習俗苟偸に相成、学に家法・宗主と申もの一向に之無、右に付、経治め候者、往々折衷と唱へ、第一経之本文にも不熟、先儒の伝註にも不渉、只管彼此を扭捏し候て、妄に主張を成し……」『佐藤一斎宛書簡』(14) 天保五年（1834）象山24歳。江戸に初めて遊学した若き象山は、師の佐藤一斎の陽明学的傾向や崎学之徒（山崎闇斎派）を批判する客気に充ちた書簡を出したが、そこで「家法・宗主に即さなければ学問を真に修得できない」と強言している。

そのような主知主義的、権威主義的象山には、儒学が理想とする周の封建制と当代の徳川幕藩体制の封建制とがオーバー・ラップし、その下での身分秩序は天地自然に適合する自明的で永久普遍な社会秩序なのである。すなわち、社会秩序は人為の産物であるからその価値は絶対的なものではなく、人間の意思と行動によって変革可能なものだとする近代的認識は象山にはみられない。「詳証術は万学の基本なり」『省譽録』と道徳学ではなく自然科学こそが学問の基本だとする姿勢が明確に表明されていたのにもかかわらず、政治・社会制度を科学の対象とはしなかったのである。

一方、「学びて思わざれば罔し」にアクセントを置く小楠は、封建的身分制度に疑問を投げかけるのである。

―――勝海舟との交流―――①

『海軍問答書』(16)元治元年（1864）三月。小楠56歳。（下関攻撃を企てる英・米・仏・蘭連合艦隊と抑留談判するため長崎に差遣された幕府軍艦奉行竝勝海舟宛に草されたもの）において小楠は次のように進言する。国力を伸展させる方策のうちとりわけ大切で且つ緊急を要するものは強兵である。この時勢となっては海軍にまさる強兵はないのである。では海軍を設立するにはどうすればよいか。海軍に関する一切の規則は西洋の例を参考にして訓練すれば、日本人の素質は優れているから三年とたたないうちに海軍術を修得してしまうだろう。「伝習既に熟するに随ひ別に将校を用いることを禁じ、総て此の諸生をして軍艦の職役を命じ其才能長技に随て任用し、匹夫たりとも一艦の長一軍の将にも挙げ用ひ、貴族たりとも所長なければ用ひず、一切太平因循の習弊を去り」、厳正な軍国の法を施行し、信賞必罰、威令を明らかにすれば、軍の規律は粛然として行われるであろう、と。

門地門閥に依らず実力・業績に従って各職務を任命する。たとえ身分が低くとも有能であれば艦長や海将にも登用し、無能なら高貴な身分のものでも用いない。このような制度は、いかに一軍艦内のシステムとはいえ正に近代市民社会のエートスの基盤の一つメリット・レイティング・システム（merit rating system，能力主義）に他ならず、決して封建社会のそれではない。

このような小楠の構想は、一介の無役の御家人の子から身を興し、幕末維新の激動期に開明的な役割を演じた一代の英傑勝麟太郎義邦（海舟）によって生かされることになる。

元治元年（1864）五月、神戸に幕府の海軍教育機関である操練所が開設されるが、これは海舟が将軍家茂に直談判して承知させたもので、「一大共有之海局」(17)すなわち、幕府や諸藩が所有している艦船や人材を集めて海舟が身につけた洋式航海術や軍事技術を伝習し、日本の海軍力を一大飛躍させようとするものであった。

当時すでに幕臣海舟は、幕藩体制を超越した「日本国」つまり幕府と諸藩の公議による新しい統一国家を想定していたのである。それ故、海軍操練所の門戸は幕臣のみならず広く諸藩に開放され、また藩士だけでなく脱藩浪士や士分以下のものも入所が許された。

海軍操練所人員募集布告に言う。

「今度、海軍術大に興させられ、摂津神戸村へ操練所御取建に相成候に付、京坂奈良堺伏見に住居の御旗本・御

家人子弟厄介は勿論、四国九州中国迄、諸家家来に至る迄、有志の者は罷出修業いたし、尤業前熟達の者は御雇又は出役等にも仰付らるべく候間、委細の義は、勝安房守に承合せらるべく候」[18]

海舟の門下生坂本龍馬（周知のように彼は酒造業を家業とする〝一領具足〟の郷士出身で本来の士分ではない）を塾頭とする操練所の運営は、因循姑息の習弊から自由であり、各藩士や〝卑賤草莽之徒〟は放課後ともなると二百余名相集合し、幕府の通達「処士横議の禁」を無視して要なき時事の慷慨話に耽り騒然たる雰囲気であった。

それがため、操練所は激徒や幕府批判の巣窟と睨まれ、海舟は御役御免の上、元氷川の屋敷に一時逼塞の身となってしまった。そしてさらに、操練所も元治二年三月、僅か一年足らずで正式に閉鎖という憂き目にあうのである。その間、伊達小次郎（後に条約改正の立役者となる陸奥宗光）、伊東祐亨（日清戦争時、連合艦隊司令長官のち元帥）、堀基（維新後北海道大主典として開拓に尽力し、鉄道を敷設して自ら炭鉱鉄道会社社長となる）などの逸材を育成したのであるが、その中の超大物はなんといっても坂本龍馬であろう。海舟の意志を継ぐ龍馬とその一党伊達小次郎らは操練所閉鎖後、師海舟のお膳立てで薩摩に身を寄せ、海舟が33歳から37歳迄オランダ軍人カティンディケー[19]らの指導を受けた海軍伝習の故地長崎で浪人結社亀山社中を結成。それを薩摩、長州、土佐、越前、四藩出資による一種の株式会社「海援隊」と改組し、龍馬を隊長とする諸藩浪士二十余名は遠洋海運業を通じて海舟の「一大共有之海局」精神を実践することになる。

この間、龍馬によって構想された新国家体制の基本綱領案「船中八策」には海舟や小楠の思想的影響が随所にみうけられる。一、大政奉還、朝廷が中央政府を構成する。一、上下議政局を設け、議員が政治のすべてに参賛し、政治は公議によって決する。以下、人材登用、条約改正、海陸軍の整備、憲法の制定などであるが、この構想は土佐藩士後藤象二郎によって幕藩体制を温存する列藩会議構想に改変・後退させられ、藩父山内容堂によって幕府に提出されたことはよく知られている。

話を操練所に戻すが、小楠は後見する二人の甥、左平太と太平を海舟に依頼[20]して海軍操練所に入所させ、同所閉鎖後は長崎済美館のG・H・F・フルベッキ[21]の下で語学研修を課し、慶応二年（1866）四月、アメリカへ遊学させた。

その送別の辞が残っている。

語録「左平太、太平二甥の洋行に際して」慶応二年四月二七日．（原漢文）

堯舜孔子の道を明らかにし
西洋器械の術を尽くさば
何ぞ富国に止まらん
何ぞ強兵に止まらん
大義を四海に布かんのみ

心に逆らうこと有るも
人に尤むることなかれ
人を尤むれば徳を損ず
為さんと欲するところ有も
心に正むることなかれ
心に正むれば事を破る
君子の道は身を修むるに在り

二語を録して、左、太二甥を送る

小楠[22]

小楠は二人の甥に、堯・舜・孔子の道を究め、さらに西洋の科学技術を身につければ大義を世界に広めることができる、決して富国強兵だけが目的ではない、他を咎めず自己の修養に邁進せよとの小楠の送辞は、帝国主義のパワー・ゲームの時代にあってあまりにも理想主義的で楽観的である。アメリカの宣教師で後に維新政府顧問となるフルベッキに親炙し、万事その配慮で洋行した左平太、太平の目的はあくまで洋式航海術の修得にあった。

その辺の齟齬が気になし、また同じ年に公刊された福沢諭吉の『西洋事情』（初篇）と対比すると、外遊経験がなく海外事情は海舟らからの耳学問や翻訳書で得ていた小楠と、すでに滞米一ヶ月、滞欧一年の経験があり蘭英二ヶ国語に堪能であった諭吉との開明性の質や方向の相違が解かるが、それについては前に少々触れたが[23]稿を改めて詳述したい。

ともあれ、二人の甥は、後年小楠が維新政府に出仕し

たことも手伝って、改めて太政官より留学を命ぜられ左平太は滞米６年の後新政府の元老院権小書記となり、太平は先述した熊本バンド結盟の母胎ともいうべき熊本英学校の創設に尽力するが惜しいことに二人とも夭折してしまう。

小楠が幕臣の中で最も親交の厚かったのは勝海舟と大久保忠寛（一翁）であろう。両者とも幕末期の幕臣中その開明性では最右翼にランクされる人物であるが、彼等との交流によって小楠は、最新の西洋事情や洋学の知識を得、さらに現実政治のダイナミズムの理解が可能となり、益々その経綸に磨きをかけていった。片や海舟と一翁は、小楠の人格や経綸にいたく感銘・共感し大なる敬意を払っていたようだ。

「おれは、今までに恐しいものを二人見た。それは、横井小楠と西郷南洲とだ。横井は、西洋の事も別にたくさん知らず、おれが教えてやったくらいだが、その思想の高調子なことは、おれなどは、とてもはしごを掛けても、及ばぬと思ったことがしばしばあったヨ。おれはひそかに思ったのサ。横井は自分で仕事をする人ではないけれど、もし横井の言を用ゆる人が世の中にあったら、それこそ由々しき大事だと思ったのサ。」、「横井の思想を西郷の手で行われたら、もはやそれまでだと心配していたのに、果して西郷は出て来たワイ。」、「横井小楠のことは、尾張の或る人から聞いていたが、長崎で始めて会った時から、途方もなく聡明な人だと、心中大いに敬服して、しばしば人をもってその説を聞かしたが、その答えには、常に「今日はこう思うけれども、明日になったら違うかもしれない」と申し添えてあった。そこで、おれは、いよいよ彼の人物に感心したヨ。大抵の人は小楠を取りとめのないことを言う人だと思ったヨ。維新の初めに、大久保利通すら『小楠を招いたけれど思いのほかだ』といっていた。しかし小楠はとても尋常の物尺ではわからない人物で、かつ一向ものに凝滞せぬ人であった。それ故に一個の定見というものはなかったけれど、機に臨み変に応じて物事を処置するだけの余裕があった。からして何にでも失敗した者がきて、善後策を尋ねると、その失敗を利用して、これを都合のよい方に遷らせるのが常であった。おれが米国から帰った時に、彼が米国の事情を聞くから、いちいち教えてやったら、一を聞いて十を知るというふうで、たちまち彼の国の事情に精通してしまったヨ。小楠は能弁で、南洲は訥弁だった。」、「佐久間象山は、物織りだったヨ。学問も博いし、見識も多少もっていたよ。しかしどうも法螺吹きで困るよ。あんな男を実際の局に当らしたらどうだろうか……。何とも保証できないノウ。横井と佐久間との人物はどうだというのかね。どうのこうのといったところが、それが大変な違いさ。全体横井という男は、ちょっと見たところでは、何の変った節もなく、その服装なども、黒縮緬の袷羽織に平袴をはいて、まず大名のお留守居役とでもいうようなふうで、人柄もしごく老成円熟していて、人と議論などするような野暮は決してやらなかったが、佐久間の方はまるで反対で、顔つきからして一種奇妙なのに、平生緞子の羽織に、古代様の袴をはいて、いかにもおれは天下の師だというように、厳然と構えこんで、元来覇気の強い男だから、漢学者が来ると洋学をもっておどしつけ、洋学者が来ると漢学をもっておどしつけ、ちょっと書生がたずねて来ても、じきに叱りとばすというふうでどうも始末にいけなかったよ。」『永川清話』[25]

小楠と海舟が出会ったのは、この一文によると長崎とのことであるから、海舟が長崎海軍伝習所で、幕府派遣伝習生の監督としてオランダ式航海術の学習・訓練に明け暮れていた時期、安政二年（1855）から安政六年頃かも知れぬ。

周知の如く、この安政年間に日米修好通商条約が締結され、安政の大獄により、小楠や海舟とも親交のあった吉田松陰、橋本左内が刑死するのであるが、小楠はこの時期、熊本城下から東へ８キロの田園地帯沼山津へ転居（安政二年五月）、翌年三月、開塾以来の門人矢島源助の妹つせと再婚、四時軒と号する新居で門人達の指導にあたっていた。その間、越前藩の招聘を受け安政五年三月福井へ出発、途中京都で越前藩士橋本左内（景岳）と面会、十二月迄福井に滞在し藩校明道館で講学する傍ら政務にも参与したと記録にあるが、小楠が長崎に赴いた形跡は少くとも小楠側の資料には見当らないのであるが。

とにもかくにも、邂逅後、二人は意気投合、それに大久保一翁が加わり共に肝胆相照らす仲となり、互に切磋

琢磨し良き感化を与え合う相互循環的な彼ら三人の関係は、正しくアリストテレスが『ニコマコス倫理学』でいう「互に相手の善を願う善き人同士の友愛」ピリア（Philia）を想起させるのである。そして、この小楠、海舟、一翁の三者の思想と行動の連関が、〝維新の三傑〟すなわち西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允ら倒幕派と交流・交錯し、時代を維新へと追い立てて行く原動力となったのである。

ここで、小楠、海舟、一翁の交流の軌跡、エートスの類似性などをいま一歩探ってみたい。先ず大久保忠寛（一翁）について。

明治維新の成就には、倒幕の志士たちと並んで幕臣開明派の役割を無視できないが、大久保一翁は正しくその一人であった。

一翁の果した歴史的役割を一言で述べるなら、一代の偉才勝海舟を発掘し、彼と協力して大政奉還、江戸城無血開城へと幕閣いな時流を嚮導し新しい統一日本の展望を開いたことにあろう。

癸丑の年（1853）、ペリー来航前後の国家的危機に際して、老中首座備後福山藩主阿倍正弘は幕府の独裁制を改め、外交事情を朝廷に奏聞する一方諸大名・有司に諮問して国論の統一を計りつつ、世界情勢に鑑み開国を決意した。そして身分上下にあまりとらわれずに有能な幕吏たちを第一線に登用し、アメリカ等諸外国との折衝に当たらせたのである。

大阪町奉行川路聖謨を勘定奉行に（嘉永五年九月）、徒頭堀利忠を目付・海防掛に（同六年五月）、徒頭永井尚志を目付・海防掛に（同年十月）、徒頭岩瀬忠震を目付・御勝手掛兼海防掛に（安政元年正月）、西丸留守居筒井政憲を大目付・海防掛に（同年七月）と続く一連の人材登用政策の中で、大久保忠寛も徒頭から目付・海防掛に抜擢（同年五月）されたのである。

千石取りの格式の目付に登用された忠寛は、予て海舟が幕閣宛に上申した「海防意見書」（嘉永六年七月十二日付）に接しその学識や人柄に惚れこんでいたが、阿倍正弘の人事政策に添うかたちで、無役の御家人、小普請組の軽輩にすぎない少壮蘭学者勝麟太郎を下田取締掛手付（蕃書反訳）に推挙した。（安政二年正月。海舟三十三歳）これが海舟の幕臣として活躍する第一歩となったのである。

忠寛はその後、大目付さらに御側衆へと昇進し、幕閣中枢の仲間入りをすることとなった。

忠寛は、かねがね、横井小楠が説く幕政改革、すなわち幕府の政治を「私」的なものから「公」的な方向に切り替える経綸に感服していたが、小楠が名君と仰ぐ福井藩父松平慶永（春嶽）を幕府政事総裁職に就けるため幕閣各位と折衝し成功した。

文久二年（1862）末、「幕府の攘夷を督励する勅旨」渙発され、勅使三条実美、姉小路公知東下するが、それへの対応策を練る幕議が開かれた。その席上、忠寛は「政権を朝廷に返上し、徳川家は旧領、駿河・遠江・三河の三州を領する一大名に下るべき」とする一種の大政奉還論を提唱した。しかし、それが災いして忠寛は講武所奉行なる閑職に左遷、さらに罷免されてしまう。

ところが、幕府崩壊の最終場面で忠寛は、幕府会計総裁として再登用され、前述の如く海舟を補佐して江戸城無血開城を実現し、維新後は東京府知事としてその経綸を生かしたのである。

以下

（一）横井小楠――勝海舟との交流――②へ続く

注

(1)　『小楠堂詩艸』の中「沼山閑居雑詩」
『小楠遺稿』横井時雄編。（民友社・1889 年）による。
拙稿「横井小楠から明六社へ―(1)」大阪芸術大学紀要『芸術』18。45 頁左

(2)　同上

(3)　同上

(4)　『日本思想大系』55（岩波書店・1971 年）507 頁

(5)　同書 448 頁

(6)　同書 448 頁～449 頁

(7)　子思『中庸』第二十章

(8)　前出。『日本思想大系』55。496 頁

(9)　『省僭録』安政元年（1854）稿。（原漢文）明治四年、勝海舟により公刊。
拙稿「横井小楠から明六社へ―(1)―」
大阪芸術大学紀要『芸術』18。42 頁左、48 頁左

(10)　「国是七条」草稿（原漢文）、前出『小楠遺稿』による。
一、大将軍上洛して列世の無礼を謝せ。
一、諸侯の参勤を止めて述職となせ。
一、諸侯の室家を帰せ。
一、外藩・譜代にかぎらず賢をえらびて政官となせ。

一、大いに言路を開き天下と共に公共の政をなせ。
一、海軍をおこし兵威を強くせよ。
一、相対交易を止めて官交易となせ。

(11) 「時政に関する幕府宛上書稿」文久二年（1862）九月。（原漢文）
前出『日本思想大系』55。298 頁～320 頁

(12) 同書（303 頁）で教育の重要性を説いているが、その主たる教育対象は将来天下の大政を担う譜代大名と高禄旗本の世子なのである。

(13) 同書。302 頁

(14) 同書。658 頁

(15) 拙稿「横井小楠から明六社へ――(1)――」大阪芸術大学紀要『芸術』18。48 頁右

(16) 『横井小楠・下巻・遺稿篇』山崎正薫。
昭和 13 年、明治書院

(17) 『海舟全集・第八巻・海軍歴史』

(18) 同書

(19) Kattendijke, Huijssen Von. 長崎海軍伝習所の第二次海軍教育団長（少佐後に母国で海軍大臣）。ヤパン号（咸臨丸）を日本に回航。『長崎海軍伝習所の日々』（水田信利訳、東洋文庫）の著書がある。

(20) 「勝麟太郎宛書状」横井平四郎。元治元年（1864）四月四日。前出『横井小楠・下巻・遺稿篇』

(21) Verbeck, Guido Herman Fridolin.
長崎奉行所所属の英語伝習所その後身の済美館や長崎にあった肥前藩致遠館で英学を教授。門下生に大隈重信、副島種臣、大木喬任、伊藤博文、大久保利道、加藤弘之らがいる。

(22) 前出『横井小楠・下巻・遺稿篇』

(23) 拙稿「横井小楠から明六社へ――(1)――」
大阪芸術大学紀要『芸術』18。42 頁右

(24) 同上。40 頁右

(25) 『日本の名著 32. 勝海舟』編集江藤淳
昭和 59 年。中央公論社

参考文献

(1) 「横井小楠関係文書綴」（全 22 巻）
熊本県立博物館蔵。

(2) 『肥後藩の政治』圭室諦成。（日本談義社・1956 年）

(3) 『熊本の近代思想』圭室諦成。（日本談義社・1966 年）

(4) 『徳川合理思想の系譜』源了園。（中央公論社・1972 年）

(5) 『佐久間象山』宮本仲。（岩波書店・増訂版 1936 年）

(6) 「横井小楠の実学」（『哲学研究』第 37 巻 11）源了園。（京都大学文学部・1955 年）

(7) 『日本近代思想の形成』植手通有。（岩波書店・1974 年）

(8) 「横井小楠の理と格物について」（『日本における理法の問題』日本倫理学会編）本山幸彦。（理想社・1970 年）

(9) 「日本における儒教的理想主義の終焉(三)」（『思想』第 592 号）松浦玲。（岩波書店・1974 年）

(10)「天保期熊本藩政と初期実学院」（『熊本史学』第 43 号）鎌田浩。（熊本大学・1974 年）

(11)『近代日本の形成と西洋経験』松沢弘陽。（岩波書店・1993 年）

(12)『日本における近代思想の前提』羽仁五郎。（岩波書店・1949 年）

(13)『忠誠と反逆』丸山眞男。（筑摩書房・1992 年）

(14)『福沢諭吉全集』慶応義塾。（岩波書店・1958～64 年）

(15)『西周全集』大久保利謙。（宗高書房・1960～66 年）

(16)『日本近代史学事始め』大久保利謙。（岩波書店・1996 年）